

今春川崎短大を去り、岡山県立大学で教育方法論と健康心理学を教えるのみとなった。そこにパピルスの巻頭言という大役を高橋会長から依頼され、「これは困った。」と思ったが、観点を変えると、自分のしてきた46年間の教育法の反省ができる絶好のチャンスだと考え直して引き受けた。

現代日本の教育は理念としては人格の完成をめざし生きる力を育てることをめざしているはずである。そのためには一人ひとりの能力を最大限に伸ばすべく、その個人に最適な方法で援助することがのぞましい。ところで、教育は「教」と「育」であるといわれ、この両者がうまく調和してはじめて真価が現れる。端的に示すと次の二側面があることになる。

「教」－教える－教授；知識を理解させ技能を身につけさせるように教え授ける。
「育」－育てる－支援；関心、意欲、態度を育て、思考力を高めるために援助する。

今教壇を離れてみて、はたして実行できたか疑問を感じている。小学校低学年の児童を対象とした期間がかなり続いたせいで、「子どもは天使ではない。調教して生活習慣をしつけねば野獣になってしまう。」と教育実習生を叱咤激励し、学習指導でも問題の解き方は例を示して模倣させ、計算はドリル中心で速さを競わせるなど…。確かにペーパーテストの得点は向上したものの、理想の姿とはほど遠い欠陥モデルのようで思い出せば赤面するばかりである。

坂田先生のご好意で算数教材研究の講義を担当することができ、ここ8年間受講学生に模擬授業をさせてきた。その授業記録の一部を分析してパピルス6号に発表したが、私がおち入ったと同じ傾向が認められた。すなわち教師役の学生は知識・技能を与えることに汲々として、指導案のプランの消化のみに目を向けていた。児童に自由に考えさせて発表させるとどこへ行くか不安で仕方がない。そこで自問自答し、「こうしてとくとよいのですよ。」とか「見たらすぐわかっていいですね。」などと答えの先取りをしている。これでは多面的な思考力を伸ばすために必要な、観点を変更する力の育成はもちろん、「生きる力を育てる」ために必須である関心、意欲、態度を育てることは期待できない。自ら問題をみつけいろいろ工夫して創造的に解決する経験の芽をつんでしまうといえよう。「育」の必要性を十分知りながら実行できなかったと猛反省している。

「今の若者は指示待ちだ!」と批判する人も多いが、実は当の本人が受け身の人間形成をしているのではないだろうか。とかく教師という立場に立つと、先に生まれた「先生」が教えすぎて、型に当てはめて安心しているような気がしてならない。21世紀の教育ではこうした心配は私の杞憂であってほしいと念じている。